応終了し、全人口の約一〇%に種痘を行った。

また、安政四年以降の種痘の組織的な実施については同地方については依然不明である。

（東北大学医学部附属病院）

江戸時代（末期）の白内障手術症例報告

――『白内翳手術人名実験録』から――

奥沢康正

古来、白内障の治療には様々な試みがなされてきたが、最も効果的な治療法は、手術による方法である。我国最古の医学書、医心方には、第五巻に治目清盲方第十四に、『眼論』から引用した金錍（錍は斧の意）による手術法が、「清盲（白内障）は金錫を用いて一針すれば、豁然として雲開き日を見るごとし」と記載されている。さらに『病源候論』の引用には、清盲の症状を述べた上で、「世間の愚医、庸医は病理を知らず、いたずらに煎剤、散薬、膏薬を用いて虚談、盲説を説くがその効果はない」と現状を愁い、清盲に針を施すことの重要さを説いている。

実際に、我国でも古くから針療法が行われたことは、平安末期に描かれた『病之草子』に「針治療をする目医師の

図」があることでも知ることが出来る。

以来、江戸時代末期に至るまで、白内障手術は盛んに行われ、江戸時代中期以降の『審視瑤函』『銀海精微』を始めとする支那眼科書にも金鍼法、あるいは貴んで「金」と称した針を用いた手術法が記載されており、これらの白内障手術は眼科に於ける最も重要な手術とされていた。

江戸時代に一流一派を名乗った各眼科流派は、これらの手術法、あるいは手術用具を秘伝中の秘伝とし、手術法についての詳細な記録を固く禁じて、口伝をもってのみ継承するという方法をとったために、当時の白内障手術が具体的にどの様に実施されたのかを知ることは極めて困難なことである。

今回、東京大学図書館に所蔵されている土生玄昌が記した『白内翳手術人名実験録(東京大学図書館蔵書B217299)』に収録された四七症例について、手術眼、手術日、手術時刻、手術回数、手術場所、手術時体位、術式、術後経過についての統計から、江戸時代末期の白内障手術の状況についての考察を加えたい。

(京都府京都市)

福山藩医学校並びに同仁病院と医人たち

江川義雄

明治二年九月に福山藩により開設され、廃藩置県の政治的行政革新により、医育・医療使命を充分発揮しないままに、明治五年十月にその終焉を迎え、郷土の医療史から姿を消した。

広島県内では、西部に広島藩があり、その藩校として修道館があり、それは幾多の変遷を経、名称を改めつつ、明治十年に広島県立広島医学校として再生し、多くの人材を生み、地域の医療・文化に寄与してきた。その一部については、既に第九十回総会で、広島地方の藩医たちとその業績についてふれたところである。今回はいわば、広島県東部地域における日本医学の黎明期を象徴するこの問題について考察しようとするものである。